

平成 21年 5月 13日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19530566
 研究課題名（和文） うつと自殺にかかわる素朴理論の日常言語的アプローチによる研究
 研究課題名（英文） The lay theories of depression and suicide: The everyday language approach.
 研究代表者
 岡 隆 (OKA TAKASHI)
 日本大学・文理学部・教授
 研究者番号：80203959

研究成果の概要：うつや自殺がどういうものであり、その原因が何であるかなどについて、一般の人々が持っている素朴な考え(素朴理論, 素人理論)を、それらの人々が日常使用している言葉を分析することによって明らかにしようとした。素朴理論に一定の傾向があること、素朴理論が科学的で専門的な理論とは異なることが明らかとなった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：社会系心理学, 社会的認知, 社会言語学, メンタルヘルス, 素朴理論

1. 研究開始当初の背景

(1)メンタルヘルスに関する素朴理論(しろうと理論, 素人理論, naive theory, lay theory)

うつ病, 統合失調症等の精神疾患について, 専門的知識のない一般の人びとが, 科学的知識に基づかない素朴な概念をもっていることが知られている。たとえば, Rippere(1980, 1981)の一連の研究では, 一般の人びとが, 抑うつ的な行動の特徴や抑うつを解消する方法などの, うつ病に関する素朴な概念を持っていること, そしてその概念が科学的知識と一致する場合もあれば, 一致し

ない場合もあることを示している。また, Furnham らは, 素朴理論に関する代表的研究者であり(Furnham, 1988 参照), 広範なメンタルヘルスの問題にかかわる素朴理論の実証的研究を行っている。具体的には, うつ(Furnham & Kuyken, 1991), 統合失調症(Furnham & Bower, 1992), 自殺(Knight, Furnham & Lester, 2000)について, 素朴理論の存在を確認し, その構造を明らかにしようとしている。

これらの研究は, しかし, 一般の人びとの素朴な理論に対して, いわゆる「トップダウン型アプローチ」を採用している。これらの研究では, メンタルヘルスに関する既存の理

論や科学的知識を基準として、それとの比較や、そこからのずれ、逸脱として、あるいは、その理論的枠組みの中への位置づけとして、一般の人びとの素朴理論を把握するという方法がとられているのである。これらの研究では、このトップダウン型のアプローチによって、既存の理論や科学的知識の枠組みの範囲に限定されるかたちで、多くの一般の人びとが共有している素朴理論の内容と構造が析出されてきた。

2. 研究の目的

(1) 素朴理論への日常言語的・ボトムアップ型アプローチ

トップダウン型の方法による一般的な素朴理論の抽出は、素朴理論研究の主要な目標のひとつである。しかし、素朴理論研究のもうひとつの主要な目標として、日常の生活のなかで思考し行動する人びとに、その素朴理論がどのような影響を与えるかを明らかにすることがあげられるであろう。ことに、この理論がメンタルヘルスにかかわる場合には、後者の目標はより重要になる。すなわち、自分のメンタルヘルスに、その素朴理論がどのようにかかわっているか、あるいは、メンタルヘルスの問題を抱えた他者に対する思考や行動に、その素朴理論がどのようにかかわっているかを明らかにすることは、自分のメンタルヘルスの維持・改善、他者への社会的支援(social support)の授受とその効果の観点からみると、ことさらその重要性が認識できるであろう。

日常の人びとの思考や行動への素朴理論の影響は、その素朴理論が、いわゆる「ボトムアップ型アプローチ」で、それも日常の人びとのまさにその思考や行動を導く「日常の言葉で」を用いて抽出されるときに、最も予測力のあるかたちで検討できると考えられる。本研究は、メンタルヘルスの問題、とくに「うつ」と「自殺」について、人びとが持っている素朴理論を、人びとの日常言語で抽出し、その構造を明らかにするとともに、その素朴理論が、自己のうつや自殺、他者のうつや自殺に対する認知反応、感情反応、行動反応にどのようなかかわりをもっているのか、その素朴理論がどのように形成され、どのように変容・維持するのかを明らかにすることを目的としている。

(2) 目標1: 「うつ」と「自殺」に関する素朴理論の日常言語

本研究は、うつと自殺に関する素朴理論に焦点をあて、それらの素朴理論がどのような日常言語で構成されているのかを明らかにする。うつや自殺に関する既存の理論や科学的知識、それに基づく既存の態度尺度や意識

質問紙を利用するのではなく、うつや自殺に連合する日常言語を、文章完成法による自由記述を通して収集し、その素朴理論にどのような言語的特徴があり、どのような構造を持っているかを、主にテキスト・マイニングの手法を通して明らかにする。

(3) 目標2: 素朴理論の形成・規定要因の検討と、素朴理論の帰結の検討

本研究は、さらに、うつと自殺の素朴理論を形成させ、その内容を規定する要因を検討する。たとえば、人びとのさまざまな属性、経験、対人環境、情報環境によって、素朴理論の内容がどのように異なるかを検討する。また、本研究は、このように形成され、規定されている素朴理論が、どのような認知的、感情的、行動的結果をもたらすかを明らかにする。たとえば、素朴理論と自己に対する態度との関係、素朴理論と他者（一般的他者およびうつや自殺の問題を抱えている他者）に対する態度（ステレオタイプの認知や偏見を含む）や行動（差別を含む）との関係を検討する。

3. 研究の方法

(1) 調査協力者 首都圏の私立大学2校の学生313名（男性167名、女性143名、不明3名、平均年齢19.82±1.22歳）が質問紙に回答した。

(2) 質問紙の構成 『「うつ」についての意識調査』と題された調査票は、うつに関する文章完成法と、その他の付加的測度によって構成されていた。

文章完成法は、全5部から構成されていた。第1部から順に①「うつ」、②「うつの人や人びと」、③「うつの原因や理由」、④「うつの性質や特徴」、⑤「うつの軽減や治療」について、それらを主語として、それに続く述部を空欄として、その空欄に、心に浮かぶことを自由に記述するよう調査協力者に求めた。なお、「うつ」については、「鬱」「抑うつ（抑鬱）」「うつ病（鬱病）」とも表現されるという説明がなされていた。

付加的測度は、自己記入式抑うつ尺度(SDS)、うつに関する知識や経験の有無、うつに関する知識の情報源を測定するものであった。最後に、年齢と性別、専攻、学年の記入を求めた。

(3) 手続き 調査実施者の指示により調査を進めた。調査者は、教示文を読み上げた後、各部とも2分間でできるだけ簡潔な文章をできるだけ多く完成するよう求めた(最大20まで)。その後の付加的測度に関する質問項目については、調査協力者各自のペースで回

答を求めた。

4. 研究成果

ここでは、第1部「うつについて心に浮かぶことを記述してください」という指示に対して記述された文章に関する分析結果のみ報告する。

構成要素数は、分ち書きの処理をチェックした時点で、1335となった。句読点、助詞、記号を除外した構成要素数は1292、記述頻度が多いが「うつ」に関するイメージとは直接関連がないと判断された記述(e.g., 「ある」、「した」)を除外した構成要素数は1204であった。各構成要素の出現頻度が5以上の記述を抽出したところ構成要素数は108となり、これを分析対象とした。各構成要素の出現頻度が30以上の記述をTable 1に示す。「病気」、「暗い」、「つらい」等の記述が見られた。「やる気」は「やる気がない」という記述のなかで、「なくなる」は「やる気なくなる」等で見られた単語であった。

Table 1

第1部の構成要素度数とサンプル度数

構成要素	構成要素度数	サンプル度数
病気	133	117
心	86	82
暗い	77	76
やる気	63	63
つらい	51	50
なくなる	41	34
治る	33	32
病	33	29

注:構成要素度数が30以上の記述のみ。

各構成要素の出現頻度が5以上の記述に関して、構成要素×サンプルのクロス表への対応分析を行った。分析対象とするサンプル数は302となった。その結果、固有値は第1成分から順に.496, .469, .451, .441..., 寄与率は第1成分から順に, 2.43, 2.29, 2.20, 2.15..., 累積寄与率は2.43, 4.72, 6.91, 9.06...であり, 成分数15までで29.22%であった。次に, 成分ごとにどのような構成要素が重み付けられているかをみた(Table 2)。第1成分では問題, 不安定, 第2成分ではカウンセリング, 落ち込む, 第3成分では不安

定, ゆううつといった構成要素がプラス方向に関連していた。

Table 2

各成分の成分スコア一覧(第3成分まで)

第1成分

構成要素	成分スコア
問題	1.5
不安定	1.42
起こる	1.25
協力	1.17
静か	-1.86
出たく	-2.01
ぼーっと	-2.04
家	-2.28

第2成分

構成要素	成分スコア
カウンセリング	1.21
落ち込む	1.03
招く	1.03
うつ	0.97
ストレス	-1.69
弱い	-2.25
起こる	-2.94
不安定	-4.03

第3成分

構成要素	成分スコア
不安定	2.79
ゆううつ	2.56
うつ	2.07
弱い	1.79
精神病	-1.97
性格	-1.96
問題	-2.43
むずかしい	-2.53

注:上位と下位4番目の構成要素のみ記載

最後に, 対応分析で得られた成分スコアをもとに, 構成要素をクラスター化したところ, 3つの大きなクラスターがまとまった

(Table 3)。それらはそれぞれ、「うつの性質や特徴」にかかわる記述，うつになることにかかわる記述（「うつの原因や理由」にかかわる記述），「うつの人（びと）の特徴」にかかわる記述と解釈することが出来るであろう。本研究があらかじめ想定しており，そのことを質問票の第2部から第5部で調査した4つのクラスターのうち3つのクラスターが，実際にもまとまったと考えられる。

本研究が想定していた4つ目のクラスターである「うつの軽減や治療」は，実際には大きなクラスターとしてまとまることはなかった。大学生の素朴な理論のなかには，うつの軽減や治療にかかわる概念は顕在していないのかもしれない。実際にTable 3にあるとおり，本研究の質問票の第1部の分析で得られた第1クラスターのなかには，うつは「治らない」という，科学的知識には一致しない記述が見られていることから，このことは理解できよう。

Table 3

構成要素のクラスター化の結果

第1クラスター (6)	第2クラスター (31)	第3クラスター (5)	第4クラスター (2)
いや	かかる	できない	感じ
こわい	なく	一人	弱い
イメージ	なりやすい	解決	
治らない	ひきこもり	悩み	
性格	カウンセリ ング	問題	
精神病	ストレス		

注：クラスター4までについて，構成要素の一部を表示。

カッコ内はクラスターサイズ。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 岡隆・坂本真士・羽生和紀 (2007). 「うつ」に関する日本の大学生の日常言語による素朴理論. 日本大学文理学部人文科学研究科研究紀要, 73, 172-173. 査読無.

〔学会発表〕(計4件)

- ① 奥村泰之・岡隆・坂本真士・勝谷紀子 大学生のうつ病治療の認知—自由記述データの分析—. 日本社会心理学会第49回大会. 2008年11月. 鹿児島大学.
- ② Katsuya, N., Oka, T., & Sakamoto, S. Lay theories of depression among Japanese undergraduates: Text mining analyses. The 29th International Congress of Psychology. 2008年7月. Berlin, Germany.
- ③ 勝谷紀子・岡隆・坂本真士 日本の大学生におけるうつのしろうと理論(2)—うつ経験者と非経験者の比較— 日本心理学会第71回大会. 2007年9月. 東洋大学.
- ④ 勝谷紀子・岡隆・坂本真士 日本の大学生におけるうつのしろうと理論—テキストマイニングによる分析. 日本心理学会第70回大会. 2006年11月. 九州大学.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡 隆 (OKA TAKASHI)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：80203959

(2) 研究分担者

坂本 真士 (SAKAMOTO SHINJI)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：20316912

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

勝谷 紀子 (KATSUYA NORIKO)

日本大学・大学院文学研究科・研究生

奥村 泰之 (OKUMURA YASUYUKI)

日本大学・大学院文学研究科・博士後期課程